

Die Heidelberger

創立 45 周年記念号

2021 年 12 月発行



表紙絵：萩原（本校スタッフ）

発行：ドイツ語学院ハイデルベルク
東京都渋谷区代々木 1 - 59 - 1 - 5F
03-3374-4863



ドイツ語学院ハイデルベルクは、ことし設立 45 周年を迎えました。この間に日本人のドイツやドイツ語圏に対する接し方は大きく変わってきました。

1960 年代の初めに小田実の「何でもみてやろう」という本が出版され、瞬く間にベストセラーになりました。なによりも、先進国とりわけアメリカで、若い日本人が自分の道を切り開く大胆な試みが描かれていたためです。

1969 年になると日本は経済面でドイツを追い越し、世界第 2 位の経済大国になりました。こうして、日本人にとってのドイツは魅力的な国であるだけでなく、心理的にも身近な国となりました。日本人にとってドイツに旅すること

もドイツで学ぶことも、以前よりずっと容易になったのです。ドイツ語学院創設者で初代学院長の柴田さんからうかがったお話では、当時の日本人のドイツ語への関心は非常に高く、教室はいつもほとんど満杯だったそうです。

この頃ハイデルベルクで学ばれる方の動機は多種多様で、ドイツで音楽の勉強をしたい、ドイツの大学で学びたい、パン焼きを習いたい、お花屋さんで経験を積んで日本に帰ってお花屋さんをはじめたいという方も出てこられました。もちろんドイツの名所を訪れてみたい、なるべく多くのドイツの方と話をして自分の視野を広めたいという方もいらっしゃいました。

ドイツ語を学ぶこうした動機づけは、今も変わらずに続いています。そして、ますます多くの方々がはっきりとした目標をもってドイツ語を学びに来られます。もっとも、現在ではコロナパンデミックのために、再びドイツに行けるようになるまでは、まだまだ辛抱をしなくてはなりません。

私どもドイツ語学院ハイデルベルクの教員一同は、今日のような状況下にあっても、今後とも皆さまのご期待に添えるようベストを尽くすつもりです。



現・名誉・初代 3 学院長



2019 年クリスマスパーティーにて

Das Deutsche Sprachkolleg Heidelberg feiert sein 45. Jubiläumsjahr. In diesem Zeitraum hat sich die Einstellung der Japaner zu Deutschland und dem deutschsprachigen Raum stark verändert.

Anfang der 60er Jahre erschien ein Buch von Makoto ODA unter dem Titel „Schauen wir uns alles an!“. Das Buch wurde ein Bestseller, vor allem weil es sich um die kühnen Versuche eines jungen Japaners handelt, sich in den führenden Ländern, allen voran den USA, zu behaupten.

Im Jahr 1969 überholte Japan wirtschaftlich Deutschland und avancierte zur zweitgrößten Wirtschaftsmacht der Welt. Damit ist Deutschland für Japaner nicht nur ein attraktives Land, sondern auch psychologisch näheres Land geworden. Japaner konnten leichter nach Deutschland reisen oder in Deutschland studieren. Der Gründer und erste Direktor des Sprachkolleg Heidelberg berichtet, dass das Interesse der damaligen Japaner an Deutsch sehr hoch war und die Klassenzimmer fast immer überfüllt waren.

Schon damals nahmen viele an unseren Kursen teil, vor allem aus den folgenden Gründen: in Deutschland Musikunterricht nehmen, an deutschen Hochschulen studieren, Brotbacken lernen, im Blumenhandel Erfahrungen sammeln, um später in Japan selbst Blumenhändlerin zu werden, aber natürlich auch Sehenswürdigkeiten in Deutschland besuchen, mit möglichst vielen Deutschen ins Gespräch kommen und auf diese Weise den eigenen Horizont erweitern.

Auch heute sind die Motive fast gleich geblieben. Immer mehr Kursteilnehmer lernen Deutsch mit konkreten Vorstellungen. Allerdings müssen wir heute wegen der Corona-Pandemie noch Geduld haben, bis man Deutschland wieder besuchen kann.

Wir, alle Lehrerinnen und Lehrer des Sprachkollegs Heidelberg, geben auch in der heutigen Situation weiterhin unser Bestes, um Ihren Erwartungen gerecht zu werden.

Grußwort

von Herrn Oberbürgermeister
Prof. Dr. Eckart Würzner
von der Stadt Heidelberg

Seit nunmehr 45 Jahren gibt es das Deutsche Sprachkolleg in Tokyo und es ist mir eine Freude, Ihnen persönlich als auch im Namen der Stadt Heidelberg zu diesem Jubiläum die allerherzlichsten Glückwünsche auszusprechen. Die deutsche Sprache und Kultur auf eine spannende Art und Weise international zu vermitteln, ist eine wunderbare Aufgabe, die dem verständnisvollen Umgang und fruchtbaren Austausch zwischen unseren beiden Ländern dient.

45 Jahre sind eine beträchtliche Zeit, in denen sich viel verändert und in den letzten Jahrzehnten hat Ihr Sprachkolleg eine Menge Hürden überwinden müssen. Gerade aktuell stellt die Pandemie jeden einzelnen von uns, insbesondere aber auch die Bildungsbranche vor eine große Herausforderung, die Sie mit der Umstellung auf den digitalen Unterricht jedoch sehr gut gemeistert haben.

Es ist wunderbar, dass Sie ein Stück Deutschland in Japan erlebbar machen und die traditionsreiche Verbindung zu Heidelberg wahren und ausbauen. Ich persönlich bin immer gerne bei Ihnen. Ich wünsche Ihnen weiterhin alles Gute!

Prof. Dr. Eckart Würzner
Oberbürgermeister der Stadt Heidelberg

創立 40 周年記念パーティーにて

祝辞



東京のドイツ語学院ハイデルベルクが創立
45 周年を迎えられるにあたり、私個人として、
またハイデルベルク市長としてお祝いを申し

上げることは大きな喜びです。国境を越えてドイツ語およびドイツ文化を興味深く伝えていることは、独日両国の理解と実りある交流促進のために素晴らしい仕事です。

45 年は長い歳月であり、その間に多くのことが変わり、この数十年で貴ドイツ語学院は多くのハードルを乗り越えて来られました。現在、パンデミックは私たち一人一人に大きな課題を突きつけており、とりわけ教育分野は大きな問題に直面していますが、デジタル授業に切り替えることで見事に克服されて来られました。

日本にいながらドイツの一端が経験でき、ハイデルベルク市との伝統的なつながりを保ちさらに広げていくことは素晴らしいことです。私自身、皆さんと共にあることをいつも嬉しく思っています。今後とも益々のご活躍を期待しています。

ハイデルベルグ市長
エッカート・ヴュルツナー



Grußwort

Karl-Heinz Rippel
Akademieleiter/Heidelberg von der Stadt Heidelberg

Mit großer Freude und in Anerkennung Ihrer wertvollen Arbeit möchte ich Ihnen meine besten Glückwünsche zu Ihrem 45-jährigen Firmenjubiläum aussprechen.

Als Heidelberger Sprachschule fühlt sich das gesamte Team der Academy of Languages Heidelberg geehrt nun schon fast 15 Jahre mit Ihrem Sprachinstitut zusammen arbeiten zu dürfen. Wir wünschen Ihnen für Ihre künftige Arbeit weiterhin viel Erfolg, und wir freuen uns auf weitere gemeinsame Projekte mit Ihrem Sprachkolleg.

Mit freundlichen Grüßen/Best regards

祝辞



このたびの創立 45 周年を心よりお慶び申し上げます。

私どもハイデルベルク市の語学学校アカデミー・オブ・ランゲージ・ハイデルベルクの全員が、15 年ほど前からドイツ語学院ハイデルベルクと素晴らしい協力関係にあることを光榮に思っています。今後のご活躍をお祈りするとともに、貴学院とのさらなる共同プロジェクトを楽しみにしています。

創立 45 周年を迎えて

初代ドイツ語学院ハイデルベルク学院長
柴田 昌治



今から 50 年ほど前の日本、という
か東京は本当にドイツ語のブームみた
いな状況でしたね。今、そんな話を
聞いても、信じられない人の方が多い
だろうとは思いますが。

何しろ、ハイデルベルクができる
前に既にゲーティンスティテュートの他に 2 つの大きな私立の
ドイツ語学校があったのが当時でした。

そんな状況の中で新たに創られたのがドイツ語学院ハイデル
ベルクです。一年で急速に大きくなり、もの凄い活気に満ちた
学校でしたね。

当時のハイデルベルクはそんな状況でしたから、いつも生
徒さんの数も一千人を超えていました。

ハイデルベルクが創立当初から大事にしていた基本姿勢と
いうのは、いつも楽しくドイツ語を学べる環境を作ることでした。
この姿勢は私が経営を離れてから今も変わらずしっかりと
持ち続けていると思います。

そういう意味では、日本のドイツ語の世界に新しい雰囲気
を持ち込んだのがハイデルベルクだったのではないかと思います。

今はそういう昔あった周りの環境はなくなりましたが、ド
イツ語は私達にとって魅力的な言語である事に変わりはありませんし、ドイツは今も私にとって第二の故郷であることにも変
わりはありません。

ハイデルベルクはそういう意味で
はドイツ語教育の歴史の中で、一定の
歴史的役割を果たせたのではないかと
思っている今日この頃です。

Vor etwa 50 Jahren befand sich Japan, oder besser gesagt
Tokio, inmitten eines regelrechten Deutschbooms. Ich weiß, dass
viele Menschen es kaum glauben würden, wenn sie heute eine
solche Geschichte hören würden.

Immerhin gab es vor der Gründung von Heidelberg neben dem
Goethe-Institut bereits zwei große private Deutschschulen.

Unter diesen Umständen wurde das Deutsche Sprachkolleg
Heidelberg neu gegründet. Es wuchs innerhalb eines Jahres
schnell und war eine sehr lebendige Schule.

Damals war Heidelberg in einer solchen Situation, dass die
Zahl der Schüler immer über 1.000 lag.

Von Anfang an war es die Grundeinstellung von Heidelberg,
eine Umgebung zu schaffen, in der das Deutschlernen Spaß
macht. Diese Einstellung hat sich auch nach meinem Ausscheiden
aus der Geschäftsleitung nicht geändert.

In diesem Sinne denke ich, dass Heidelberg eine neue Atmo-
sphäre in die Welt der deutschen Sprache in Japan gebracht hat.

Obwohl das frühere Umfeld verschwunden ist, ist Deutsch
immer noch eine attraktive Sprache für uns, und Deutschland ist
immer noch meine zweite Heimat.

Das ist es, was Heidelberg aus-
macht. Ich denke, dass Heidelberg
in der Geschichte des Deutschunter-
richts in Japan eine gewisse histori-
sche Rolle gespielt hat.



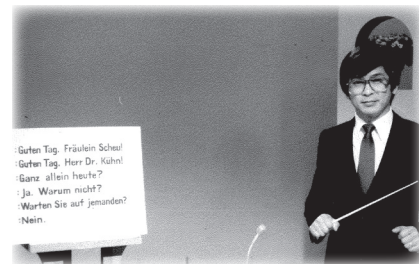
創立当時の教師会議



創立当時のパーティー



創立 40 周年記念パーティー



1984 年 NHK テレビドイツ語講座講師
同講座には本校講師が多数出演

留学希望者が直面する令和の鎖国

ケルン文化会館館長 相澤 啓一

ドイツ語学院ハイデルベルクに通われる方の中にも、ドイツ留学を考えていた人や、留学経験をお持ちの方が少なからずいらっしゃると思います。せっかく「ハイデルベルガー」に初登場させていただくので何か楽しい話題を、と考えたのですが、ケルンで仕事をしている私にとって今やっぱりとても気がかりなのは、留学を待ち続けている学生たちのことです。

日本とドイツではこのところ、コロナ感染流行のリズムが完全にずれています。日本が医療崩壊で苦しんでいた東京オリンピックの頃、コロナ沈静化に自信を深めたドイツが以前のような日常生活を取り戻すべく導入したのが3Gルールでした。その後日本は11月から12月にかけて落ちつきを取り戻しましたが、片やドイツではデルタ株拡大とともに感染者数が急増し、ミュンヘンではオクトーバーフェストもクリスマスマーケットも2年連続で中止となってしまいました。誰もが身をもって体験しているように、管理不能の感染症は私たちの日常生活に否応なく介入して社会に大きな変化をもたらしています。

感染カーブは原因不明のまま突然上がったたり下がったりします。いろいろな対策や説明がメディアに溢れていますが、情報の正確さを私たち素人が判断するすべは乏しいので、反ワクチンの主張が陰謀論と結びついたり、日本の感染状況がちょっとよくなると「日本人は特別」との主張がもてはやされたりすることも珍しくありません。こうなると問題はコロナにとどまらず、これまで表面化しなかった私たちの日常的思考や不安の歪みの増幅に直結します。社会の中でしっかり培われてきたはずの価値観が、コロナによって簡単に揺さぶられてしまうことも起こります。留学できなくなってしまった学生たちも、そうしたはざままで苦しんでいるようです。

コロナが話題になり始めたのは2020年の年明けでした。3月半ばにはドイツでも学校や美術館などが閉鎖、国境をなくしたはずだったEU域内で再び国境が閉ざされ、人の移動が制限されました。日本政府（外務省）も昨年3月23日には、ドイツを含む欧州各国に対する感染症危険情報レベルを「レベル3：渡航は止めてください（渡航中止勧告）」に格上げしました。これを受けて文科省は、日本の各大学に対して欧州で学ぶ日本人留学生を呼び戻すよう指示を出し、協定校で学ぶ留学生たちは一斉に強制帰国となりました。中には4月開始の新学期から留学するためにドイツに到着したばかりの学生もいて、私達は、泣き崩れる学生たちをケルンから日本に送り返したものです。同じように、日本に留学しようとしていた海外の学生たちも、入国できなくなりました。それでも、コロナの全貌がまだよくわからなかったこの時期に取られた非常措置は、仕方ないもの

として一定の理解を得ていたように思います。だって仮に留学できたとしても、世界中の大学が手探りでオンライン授業への対応を迫られていた時期のことですから。

それから1年半以上経過しました。欧州内の国境は2020年5月頃から再び開き始め、コロナの感染状況に応じて細かいルールを絶えず変えながらも、移動の自由の制約は最小限に減らされていきました。基本的人権に対する制約を必要最小限にとどめることは、欧州のコロナ対策の基本です。それでも、ロックダウン実施やワクチン接種の義務化をめぐって、何が「必要最小限」なのかをめぐる議論は、いくどとなく激しく闘わされています。そうしたヨーロッパから見てひととき目立つのが、ドイツを始めとする多くの国々を「レベル3（渡航中止勧告）」に据え置いたまま、留学を原則としてシャットダウンし続けている日本の政策です。

振りかえると、日本の文科省は21世紀に入って以来、大学の国際化に全力を傾けてきました。「国際化拠点整備事業」とか「グローバル30」、「留学生30万人」といった計画が次々打ち上げられてきました。それを受けて日本の大学もこぞってグローバル化を掲げ、「グローバル人材育成」とか「大学の国際化戦略」といった言葉が、予算獲得を目指す多くの大学のホームページに踊ってきました。あれほど盛り上がっていた大学の国際化戦略は、コロナになると掌を返したように一瞬でストップできる程度のものであったのでしょうか？ この落差の激しさを見ると、これまで求められていたグローバル化の中身そのものが改めて問われます。大学の国際化という課題がそんなに切実なら、少なくとも、留学の一律禁止という政策が2年近く続いているような事態について、国内でももっと議論があってよいのではないのでしょうか。もちろん今はこんな時期ですから、留学するのは（国内で学ぶのと同様に）毎日が命懸けです。「こんな時にわざわざ感染者の多い国に留学しなくても」と本人や家族が心配するのは十二分によく分かります。しかし、国家が、それも日本だけが突出して、ろくに議論もしないで留学を双方向ともすべてストップするのが得策かどうかは別の話です。今年は日独友好160周年にあ





たりますが、さすがその当時まで200年以上の鎖国が続いていた島国だけあって、国を閉じてしまうという発想はいかにも安易に実現可能のようです。たしかにドイツを始めとする欧州各国は長らくリスクレベル3にあります。でも、

テロの場合とは違って感染症のリスクは日本自身も「お互い様」である以上、海外留学を希望する日本人学生に渡航中止を勧告する説得的な根拠とは言えません。そしてさらに状況が深刻なのが、日本で学べる日を待ち続けている留学希望者たちの状況です。

日本への留学を希望する学生たち、とりわけ日本学を学ぶ学生たちは、昨年3月以来、再び門が開くのを空しく待ち続けています。その悲鳴は、「日本における留学生へのビザ発行・入国許可に関する請願書」の署名活動をしているハイデルベルク（←大学です）の日本学学生サイトでも見ることができます。（<https://www.facebook.com/fsjahd>）ドイツで日本学を学ぶ学生の多くにとって、日本留学は3年間の学士課程カリキュラムに組み込まれている必須課題ですから、このままでは卒業の目途すら立ちません。文科省などから奨学金を支給される研究者・院生の中には、大量の書類を提出し日本大使館などのお墨付きをもらうことで、特例的に日本への入国ができる人も出てきましたが、一般の日本学学生たちは、あてもなく待ち続けるか、専門を変更するしかありません。博士課程の学生は論文がストップするし、せっかく狭き門を越えて奨学金申請が認められた人も大半はその権利を行使できないまま、翌年に向けて再申請する空しさをかみしめることになります。それでも国内の感染状況が改善した11月始め頃には、日本政府もようやく重い腰を上げ、ビジネス関係者、留学生、技能実習生らに対する入国制限を条件付きで緩和しました。でもそのとき分かったのは、既に留学ビザを取得している人たちの長いウェイティングリストがあって、一日当たりの新規入国の割り当て数が少ないため、ビザを持っても日本に入国できるのは数ヶ月後になるという現実でした。しかもその直後にオミクロン変異株が広がり、再び外国人の日本入国が全面禁止になると、留学を期待した学生たちの淡い希望はまたもや完全に打ち砕かれてしまいました。

日本は、「移動の自由」という権利は二の次にして、まずは感染拡大を防ぐために国境というハードルを極限まで高める鎖国政策によってコロナに対応しようとしています。実際私たちの多くも、新型コロナ変異株が流行すれば水際対策を徹底するという方針に賛同しがちです。しばらく門戸を閉ざしても当分なんとかやっていけそうな日常感覚もあります。しかし現代の日本は江戸時代とは違って、さまざまなレベルの国際交流なしでやっていくことはできません。大学が躍起になってグローバル化を推進しようとしたのも、このままでは日本の学術が国際的に取り残される危機感が強く、少子高齢化に伴って多くの大学の将来像が描けなくなったからに他なりません。すでに30年近く経済成長ができなくなっている日本経済は、実習生と称

する外国人労働者やインバウンド消費を抜きに景気回復を語れなくなっています。それなのに現在、日本が実施しているコロナ対策の柱は、入国に必要なハードルを無意味に上げたり国際空港の一日当たりの処理能力を抑制したりすることによって、入国者数を一定数以下に抑えることでしかありません。日本への入国には外国での出国直前のPCR検査が不可欠ですが、世界標準のPCR検査を認めないというのも、おそらくその手段の一つなのでしょう。日本に行きたい人は、日本独自の検体採取ルールや厚生労働省作成の特殊なフォーマットを使用するガラパゴス・ルールに対応してくれる海外のPCR検査場を探して、まず右往左往することになります。日本に入国しようとする外国人に大量の書類提出を求め、それでも断念せずに書類提出する人には分かりづらい設問で些細な記入ミスを誘う入管は、入鉄砲出女を取り締まった江戸時代の関所さながらの不条理にして絶対的な権威と排除機能を担っているようです。

日本に入国する人数をなるべく少なく抑えようというこうした政策は、しかし中・長期的に見るなら、日本社会の活性を決定的に低下させ、将来の日本を危うくするボディブローでしかありません。わざわざ日本語を学んで日本に留学しようとしている外国人は、20～30年後の世界で日本を最もよく理解し支えてくれる友人となるべき人たちです。そうした貴重な人たちに私たちは今、コロナ水際対策の名の下に冷たい仕打ちをし、日本社会の対応に幾度となく失望させ、日本学を学ぶことを諦めさせて日本から遠ざけようとしているのです。私が今仕事をしている国際交流基金のケルン日本文化会館は、日本をよく理解してくれる人たちを増やすための活動を一生懸命行っている機関です。そうした立場から見ると、将来の日本にとってかけがえのない理解者たちを一斉に追い返して日本学履修者の空白世代を作る愚策が、将来の日本社会にとってどれほど深刻なダメージをもたらすか、その損害は計り知れないように思えてなりません。

一口に水際対策といっても人流抑制だけではないはずです。その気になれば日本だって海外からの受け入れ人数を大幅に増やすことが可能であることは、東京オリンピックのとき誰もが目にした光景です。なぜ空港などでのPCR検査体制を遅ればせながら整備することができないのか、コロナ発生から2年近くたつのになぜ隔離機関・施設を増やすことで空港での受け入れ人数を増やすことができないのか、日本に入国を希望する人たちの中でどうして留学生たちを少なくともビジネス関係者と同等程度に優先的に入国させてあげられないのか、これらはすべて、単なる政策決定の問題でしかありません。

正体不明のオミクロン株が出てくれば入国者を極力減らす、という選択肢は、鎖国メンタリティの日本では支持されやすい政策です。国内感染を遅らせる政策によって自分が守られていると感じる人は多いでしょう。でも、可能な対応策を怠ったまま実は無策に走っているだけのこうした令和の鎖国政策が、コロナ後の日本が最も必要とする友人との信頼関係を日々根底からぶち壊し続けているという大きな代償にも、私たちは目を向けておきたい — こんな思いが、ドイツ語を学ぼうという思いを共有する「ハイデルベルガー」読者の皆さまには、きっと伝わってくれるのではないかと願う次第です。

ハイデルベルク市の語学学校のコロナ禍の現状

F+U アカデミーオブラングージ 日本人スタッフ Kyoko Neuß

F+U アカデミーオブラングージはハイデルベルク市の中心部に位置し、日本からの留学生も年間約 250 名受け入れているドイツ最大規模の語学学校です。

コロナ以降その留学生も激減しましたが、それでも皆さん何とかドイツ留学を果たせないかと時期や受講形態を検討しながら試行錯誤されています。

私も皆さんの希望を叶えるべく、常に変わる入国制限や入国条件を確認しながら現地の情報を発信し続ける日々でした。

2021 年 9 月より日本人のドイツ入国は、ワクチン接種済みであれば無条件、未接種であればドイツの大学での進学を希望とする語学コース受講で入国が可能な状況となっています。

コロナがヨーロッパで急拡大した際には、多くの学生、特に日本人学生はほぼパニック状態となり、在籍していた半数以上の学生が急遽帰国していきました。

F+U は以前からオンラインレッスンの体制が整っていた為、すぐにオンラインレッスンに切り替えることが出来ましたが、当時は多くの学校が休校にするしかない状況で、留学中の学生も予定が大きく狂い、弊社にもオンラインレッスンの問い合わせが連日相次いでいた状況です。

幸いにもドイツでは政府が速やかに対応策を発表した為、その指示に従って学校の規定も整えることが出来ました。とにかく学生と教師、またスタッフの安全を守りながらコース提供を続けていくという事だけを考えていた日々だったと思います。

今も同様ですが、日本ではヨーロッパの感染拡大の数字だけが大きく報道されていましたが、ドイツでは実感として日常生活は何不自由なく送ることが出来ていた為、どうやってこの実際の状況を日本のお客様やエージェンツさんに伝えればいいのかと頭を悩ませていました。

新しくドイツにきた学生さんと話すと、「日本で想像していた状況と全く違って、全然普通で驚きました」、「(日本の方が制限が多いので) コロナがない世界に戻ってきたような感覚です」と皆さん仰います。

ドイツ人は規則を非常に重要に考える側面があります。その為、政府や州が決めたルールは積極的に把握しようとしており、またそれを順守します。



例えばバスやトラムではマスク着用義務があるのですが、人によっては鼻がきちんと覆われていなかったり、友達同士でいる



若いグループがマスクを顎までずらして話していることもあります。そんな時には、すぐに周りの人が注意し行動を正していました。また注意された方もすぐに従います。

その為当時はヨーロッパの中でもドイツは優等生的な立場で感染者数も低い数字を保つことが出来ていたように思います。

ただ日本人とは異なり、周りの目を気にして合わせて行動するという事が殆どないので、指定された場所以外でのマスク着用などはしませんし、宿泊施設や飲食店の規制が公に解かれれば、一斉に休暇に出かけますので、今その結果が数字として出てしまっているのではないのでしょうか。

現在はワクチン接種済みであれば、制限なく自由な行動ができ、日常生活もコロナ以前と同様に送ることが出来ています。逆にワクチン未接種の場合、薬局やスーパーマーケットなどの生活に必要な小売店や病院などの施設を除くと、たとえ簡易テストをしても入店できないという大きな制限を受けています。

ドイツ政府は来年度 2 月もしくは 3 月を目途にワクチン接種義務化を目指しており、もちろん賛否両論ありますが、大多数が義務化に賛成との世論調査が出ている状況です。

今の憂慮としては異なった意見で両方の立場の軋轢が個人レベルで発生してしまう事ですが、現時点ではお互いの意見を尊重しながら十分な議論をしていこうという傾向にあります。

語学習得を考えれば今は世界中でオンラインレッスンが可能になっていますが、やはり現地で生活するという事は全くの別物だと思います。

現地では日本とは全く別のルールや考え方、システムがあり、不安を感じている方も多いと思いますが、もし弊社にいらっしゃった際には、皆さんが到着した 1 日目から安心して過ごせるよう私が出来る限りのサポートをさせていただきます。

これからドイツ留学を考えている方は、上記のような政治的な動きにも注目して頂きながら、世界のどこにいても今自分が出来る感染対策をしっかり取っていくという気持ちで、必要以上に恐怖心を抱かず冷静に状況判断されることを願っています。

ドイツ語学院ハイデルベルクでは生徒としてもスタッフとしても大変お世話になりました、勝川由芽野と申します。私は東京藝術大学のデザイン科に在籍しており、2021年の春からシュトゥットガルト美術大学（通称ABK）に1年間留学に来ています。はらぺこあおむしで有名なエリック・カールさんが勉強していた大学です。私はインダストリアルデザイン科のデザイナー夫婦の教授のもとで勉強をしました。

このコロナ禍での留学は手続きの複雑化や様々な制限もありましたが、本当に学びの多い留学になりました。この場をお借りして、with コロナ時代のドイツ留学がどんなものだったかをお話しさせていただければと思います。

留学の始めはロックダウンの最中で、スーパーマーケットとドラッグストア以外は全て閉まっている状態でした。優しい友人たちに助けられ、布団などの生活必需品は大型スーパーで揃えることができましたが、しばらくオンラインからでしか物が買えなかったのはかなり不便でした。特に、美大生は画材や材料を揃えなければならないのに、オンラインで購入しても配送が遅れたり、思っていたのと違うものが届いたりして買い物が億劫に感じる事が何度もありました。

夏semesterの最初の頃は全ての授業がオンラインでしたが、私の学科は工房を使わないと作品制作が難しい学科であるために、大学のアトリエに行って制作することが許可されて



いました。とはいえ、アトリエにいく生徒は少なく、最初の方はあまりドイツ語を喋る機会に恵まれませんでした。私は英語も流暢に喋れるわけではなかったので、言語面でかなり苦労したと思います…。途中から少しずつ対面が増え、最終プレゼンは大きなホールで行うことができました。なんと、作品を着てみんなで用意したキャットウォークを歩くという演出付き。なぜか他の生徒のみんなはバシッと決めて颯爽と歩く中、私だけロボットのようにだと歩き直させられました…。逆になぜみんなできるのかと不思議でならなかったです。

夏休みはドイツの感染状況が良かったことと、夏休み前にワクチンを二回とも終わらせている人が多かったこともあり、みんな各々旅行をするなど、ヨーロッパの夏をかなり楽しむことができました。冬semesterからは食堂のMensaも使えるようになり、授業もほとんどが対面で、コロナ前の学生生活に近かったと思います。学期初めには三日間、オランダのロッテルダムへみんなでプロジェクト研修に行きました。様々なデザイナーさんの作品やお仕事を見に行き、大きな船を借りてみんなで海賊のように寝泊まりしたのは楽しかったです。

寒さが増して、雪も降るようになってきた最近、感染状況も悪くなっており緊張感は高まっています。シュ



イラスト：勝川

トゥットガルトのクリスマスマーケットが中止になってしまったのもとても残念です。生活必需品以外の買い物は2G（ワクチン接種済み or 回復済み）で、美術館、コンサートなどでは2G+（2G+簡易検査の提出）のルールになりました。ブースター接種を終えた友人も増えてきており、私も1月に予定しています。とはいえ、私の大学では対面での授業も依然として多く、勉強面で不満に感じることはありません。毎週のプレゼンをドイツ語で行うのはかなり大変ですが、教授のフィードバックを録音して後で聞き返すことを繰り返しているうちに、教授との検討会も白熱するようになりました。藝大では作品検討会が一人当たり5分から10分ほどだったのですが、こちらでは最低でも30分、長いと一時間ほど教授と議論をします。たまに他の生徒が意見を言ってくれることもあり、ドイツ人のディスカッション好きを身に染みて感じる日々です。シュトゥットガルト美術大学では見た目のカッコよさよりも、目的や機能性、作品のプロセスを重要視しており、授業の内容もコロナ禍におけるデザインや持続可能性や環境保護を意識した授業が展開されていて、新しい刺激をたくさん受けることができました。

ドイツ語の授業もオンラインのみですがお得な値段で受けることができ、9月は平日毎日の集中コースを取り、冬semesterは週一回で受講しています。ドイツ留学では、英語だけでも勉強することは可能ですが、何より一つ一つの授業や友達との会話を楽しめるので、ハイデルベルクでドイツ語を勉強していて良かったなと強く感じています。この一年でドイツ語と英語とデザインと、盛り沢山で学ぶことができ、大きな成長を感じられることが嬉しいです。これからもドイツ語学習は力を入れ続けていこうと思います。

この留学が初めての一人暮らしだったこともあり、生活に慣れること自体も大変でしたが、様々な価値観に触れ、自分に合う考え方や生き方を改めて考え直すことができたのが大きな収穫だったと思います。そして、いろんなハプニングを乗り越え、どんなことが起きてもなんとかなる精神を手に入れることができました。これからも、デザインとドイツ語の勉強と、自分の人生を最大限に楽しくする努力をしていければと思います。ハイデルベルクの皆様も、どうか健康にお気をつけてお過ごしください。来年こそはイースターとクリスマス会が開催できることを祈っています。

2021 年 フライブルク音楽大学 修士課程 (ピアノ科) での留学生活

市村 ひかり

私がドイツへ留学に来た1年前は、コロナ禍中にあり、受験も渡航もまさに一か八かのような状態の中渡航した記憶があります。それから1年が経ち、今はフライブルク音楽大学の修士課程、3ゼメスター目を無事に過ごすことが出来ています。今もなお感染者が増加しているドイツですが、それと同時に3回目のワクチン摂取も着々と進んでいます。私も12月初旬に既に3回目の摂取を学校で済ませました。ワクチン接種者はレストラン、デパート、コンサートの出入りはワクチンパスポートを提示すれば問題なく入れるので、ロックダウンがあった1年前とは変わり、少し動きやすい世の中ではあると感じています。私が在籍するフライブルク音楽大学も学生証とワクチンパスポートがないと学内に入館できないなど、感染対策が徹底しているため、コンサートや授業も対面できちんと行うことが出来ています。

1ゼメスター目(10—3月)には外出制限などがあったため、正直友達も多くはできず学業にひたすら励むゼメスターでした。しかし2ゼメスター目(4~9月)には段々と感染者も減り、ロックダウンも終わり、コンサートやコンクールも増えていきました。この1ゼメスター目の辛い修行の時期が実を結び、運が良いことにいくつかのコンクールの書類・ビデオ審査に受かり、夏にはチェコ、フランス、イタリアのコンクールに参加しました。コンクールの曲はとて多く、準備することは容易ではありませんが、1ゼメスター目の厳しいCoronazeitがメンタルを鍛えてくれたおかげで、異国でのコンクールの舞台も乗り切ることができました。世界に出て自分の演奏を披露すること、評価をもらうことはすごく貴重な機会であり、コンクールに挑戦できる喜びを2ゼメスター目は特にとても実感していました。

3ゼメスター目(10月から)に入り、次のコンクールに向けての準備や新たな勉強も始めています。ドイツで出来た友

達と室内楽の授業を取ったり、現代音楽の授業を取ったり、1年目とは違った勉強をし、日々学ぶことが多いです。ヨーロッパ各国からの友達も増え、それぞれの国の文化を学ぶ機会も多く、同時に日本の事について教えたり、日本料理を振る舞ったり、留学生らしさのある日々を過ごしています。残念ながらコロナ禍でクリスマスマーケットは

1週間で終わってしまいましたが、12月の休暇に入ったら、ドイツ人の友達のクリスマスパーティーに誘われたので、休暇はベルリンで過ごす予定です。厳しい状況下でも素敵な人々との出会いが私の留学生活を実りあるものにしてくれています。

ドイツ語学院ハイデルベルクでドイツ語やドイツの文化を学んでいた経験は今でも根底にあり、こうして今素晴らしい経験をヨーロッパで出来ているのはハイデルベルクでの学びのおかげだと思っています。ハイデルベルクでの授業だけでなく、パーティーでの経験や先生方、働いている方々と多く話せた経験がとても活きていると思う瞬間が沢山あります。ドイツの素敵な文化を学び、より一層自分の分野「音楽」を充実させることを目標に、これからも精進しようと思います。こうして記事を読んでもくださる皆様に少しでもドイツの留学事情・生活の様子をお届けできればうれしい限りです。



イタリアのコンクールにて



Prof. Hellwig のマスタークラスにて

エコロジー社会への転換を目指す シュルツ政権誕生

福澤 啓臣
ベルリンにて
2021 年 12 月 10 日

12 月 8 日にドイツ連邦議会は社会民主党（社民党）のオラフ・シュルツ氏を第 9 代連邦首相に選出した。「進歩」、「新しい出発」、「気候保護」、「ドイツの近代化」、「維新」などのスローガンを掲げ、エコロジー社会への転換を目指す中道左派の政権が誕生した。シュルツ首相を除く 16 名の閣僚は、同氏が約束したように 8 名ずつ平等に男女に分けられている。主な閣僚を紹介しながら、新内閣の政策及びその問題点を述べる。

11 月の最後の週に緑の党と自民党がまず閣僚ポストの人事を発表した。社民党は、閣僚ポストの男女比率を平等にするというシュルツ首相の約束を果たすために他の党のポスト配分を 12 月 6 日まで待っていた。その結果

社民党：女性 4 名、男性 3 名

緑の党：女性 3 名、男性 2 名

自民党：女性 1 名、男性 3 名

連邦省庁の配分（以下すべての省庁の前に連邦が付く）

社民党：首相（男）・内務省（女）・労働社会省（男）・国防省（女）・保健社会相（男）・建設住居省（女）・経済援助省（女）・首相府（男）
緑の党：外務省（女）・経済気候省（男）・農業食品省（男）・家族省（女）・環境省（女）

自民党：財務省（男）・運輸デジタル省（男）・法務省（男）・教育省（女）

信号機連立は 416 議席を擁しているが、12 月 8 日の首相選出の投票では、395 名がシュルツ氏に投票した。病気の 6 名を除いても、15 名少なかった。無記名投票なので、誰がシュルツ氏に投票しなかったのかは、わからない。

今回の連立協定合意に対して、緑の党の党員による賛成率が 86%で、社民党の 98.8%、自民党の 92%に比べてグッと低い。このように緑の党が連立協定に最も満足していないことがわかる。

1. 主な閣僚と政策の紹介

連邦首相：オラフ・シュルツ氏（63 歳）

シュルツ氏は言葉の人ではない。実行の人と自分を定義している。言葉を巧みに操ることはなく、ストイックな政治家として知られている。なかなか手の内を見せないとも言える。ジャーナリストの質問に答えないこともある。

17 歳、つまり高校生の時に社民党に入党している。筋金入り



の党員と言える。ハンブルク市長を経て、メルケル政権下の最後の 4 年間は副首相兼蔵相として、メルケル氏を支えた。社民党内では右派に属し、一昨年の党首選では左派の共同候補者ベアに負けている。

昨年首相候補に選ばれて以来、社民党は選挙の二、三ヶ月前まで 15%前後の支持率だった。そのため本気で首相になれると思っているのか、とマスコミからは半分揶揄の対象になっていたが、いつも生真面目に連邦首相になると表明していた。

もし緑の党が左翼党が 2、3 パーセント多く得票していたら、左派政権が誕生しただろうと前稿に書いたが、その場合シュルツ氏は困った状況に陥っていたに違いない。緑の党と左翼党から革新的な政策が次々と打ち出されて、追い込まれていただろう。この信号機連立政権では、緑の党と自民党は、基本的な政策スタンスが片や社会エコロジー市場経済、片や新自由主義市場経済と正反対の立場なので、政策上衝突するだろうが、シュルツ氏はその間をとって、落としどころを決めることになると思われ。ある意味で、調整能力に長けたメルケル氏の真の後継者と目されていたシュルツ氏の面目躍如だろう。

メルケル氏は、「政治は妥協である」と常に言っていた。ドイツの政治では、議会で与党と野党が真っ向からぶつかり合うことはあまりない。多くの重要な法案は、与野党の間で妥協点を見つけて連邦議会と連邦参議院を通過している。その点英国や米国の政治とは根本的に異なる。

現在シュルツ連立政権が連邦議会において多数になったが、連邦参議院ではキリスト教民主同盟・社会同盟の州政府の代表が多数である。つまり、一種のねじれがある。外交関係や軍隊の海外派遣など以外の法案は連邦参議院の同意が必要だ。

社民党は最低賃金 12 ユーロへの引き上げ、年間 40 万戸の集合住宅建設、ハルツ 4 の見直し、「市民金」の導入などに力を入れている。

経済気候省とロベルト・ハーベック（52歳）

シュルツ内閣の最も重要な省庁は、経済省に気候保護部門が加わった経済気候省だろう。緑の党の共同党首だったハーベック氏が副首相を兼任しながら、引き受ける。財務大臣のポストを自民党党首リントナー氏に譲った見返りとも言える。

ハーベック氏を待ち構えている課題は、常識的な政治の観点からは、革命的と言える。ドイツ社会・経済のエコロジー転換に着手しなければいけない。2016年のパリ協定の約束を守るために、ドイツは2045年までに炭素中立を達成すると宣言している。それには、まず2030年までのエネルギー改革の道筋をつけなければならない。省内の抜本的な改革、法案の作成はもちろんのこと、さらに経済界、組合、市民を巻き込んでいかなければいけない。ハーベック氏は、シュレースヴィヒ＝ホルシュタイン州の農業大臣として評価を高めた。哲学者でもあり小説家でもある。説得力のある話し手である。

炭素中立達成の鍵を握るのは、エネルギー部門

全排出量の31%と最も割合が大きいエネルギー部門、その中で特に電力の再エネ化が最も重要である。来年いっぱいでも原発(12%)からは全て撤退する。そしてメルケル政権の案では、38年までに石炭火力(30%弱)からも撤退する。緑の党はそこから大幅に前倒しし、30年までの撤退を求め、連立協定にも明記させた。ただし、「理想的には」という付帯条件が付いている。石炭火力からの撤退にはいくつかの条件を満たさなければならないからだ。

まずそれまでに電力の再エネ化が現在に45%から80%にまで進んでいること。風力発電が多い北から電力消費地の南に向けて、超高压直流送電網が完成していること。自然の気候条件による発電量の変化に対応できる蓄電能力が備わっていることなどが前提条件だ。

第一の条件を満たすには、風力発電量をこれまでの2倍以上にする必要がある。風車の数は現在の3万基から6万5千基になる。8年間で達成可能なのか、と疑問視されているが、現在の建設スピードでは無理である。現在でも北の過剰電力が蓄電もできず、水素への転換もままならず、多量が捨てられている。そのための補填金額が一千億円を超えている。

目的達成のために緑の党は連立協定で、国土の2%を陸上の風車建設予定地として確保、新建設のビルの屋上への太陽光パネルの設置義務付けが明記された。

ドイツ風力協会によると、最も不足しているのは、人員である。まず最低でも4万人

のマンパワーが必要だ。太陽光でも5万人が必要とされている。現在ドイツのあらゆる分野で熟練工や専門家の不足が訴えられている。その数は40万人と言われている。国内だけではとて

も賄えきれないので、外からの流入が期待されている。さらに風車建設の場合、現在申請から完成まで6年以上もかかると言われている行政の許認可手続きをどこまで短縮できるかも大きな鍵を握っている。計画の早い段階から市民及び環境団体の参加を求めると協定には書かれている。

財務省とクリスティアン・リントナー（42歳）

次に重要なのは、財務省だ。緑の党の党首ハーベック氏と自民党党首リントナー氏が狙っていると噂されていたが、最終的にリントナー氏に落ち着いた。連立合意の中でも同氏の意向が反映されている。パンデミックのために停止されている憲法上の国家予算の債務ブレーキは、自民党の要求通り23年から復活する。富裕層への課税強化や増税に関しては、10月15日に合意された連立予備協定では、増税しない方針が明記されていたが、今回の連立合意には記されていない。増税に自民党は強く反対しているが、将来増税する選択肢を残したとも言える。緑の党は大麻を自由化すれば、税収入が増えると主張しているが、リントナー氏の対応は未知数。

さらに、環境に害を与える補助金を見直すとしている。通勤に使う車のガソリンの購入費用は、税制面で優遇されているが、化石燃料なので、このような補助金の廃止を緑の党は要求していた。しかし、新しい運輸大臣が果たして認めるか分らない。

リントナー氏は非常に弁が立つ。2013年以来自民党の党首としてワンマンと批判れるほどの辣腕ぶりを発揮している。行政能力は未知数。

運輸デジタル省とフォルカー・ヴィッシング（51歳）

運輸省にはドイツの炭素中立の達成にとってお荷物になっている交通部門が管轄下に入っている。交通部門は全排出量の20%を占めるが、1990年以降排出量をほとんど減らしていない。ちなみにエネルギー部門は31%を占めるが、42%も減らしている。このように交通は再生可能エネルギー化が非常に遅れているので、運輸省は緑の党が狙っていたのだ。

ドイツでやはり遅れている社会のデジタル化もこの省の管轄である。

さらに緑の党は自動車を優先する交通体系の抜本的な見直しを要求していたが、連立協定では言及されていない。その上にアウトバーンにおける速度制限を、基本的人権である個人の自由に反すると主張している自民党に任せるというのだ。運輸省は自民党のヴィッシング氏が担当する。このように緑の党(得票率14.8%)にとって鍵となる重要省庁が二つもより小さな党(11.5%)の自民党に取られたことは、ポスト争いで後塵を排したと評されている。

ヴィッシング氏は弁護士が職業。自民党の幹事長。ラインラント・プファルツ州の経済交通大臣を務めた。

内務省とナンシー・フェーザー（51歳）

女性の内務大臣はドイツでは初めて。司法試験に受かり、弁護士として事務所を抱えている。30年以上前から社民党党員。



ヘッセン州の社民党党首。就任の挨拶で、「ドイツにとって最大の脅威は極右である。全力を挙げて極右から社会を守る」と表明した。

農業食品省とジェム・オズデミル（56歳）

父親はトルコからの移民。息子のジェムは18歳でドイツ国籍取得。緑の党には16歳で入党。党内でも最古参に入る。2008年から2018年まで共同党首だった。シュルツ内閣では、一時外相候補と噂されていたが、最終的に農業大臣に就任。

農業は緑の党にとって非常に重要なセクションだ。ドイツの農業は危機に瀕している。農薬をばら撒く大規模農業は生物多様性と環境の破壊を生み出している上に、気候変動も加わって土壌は疲れ果てている。有機農業への転換は緒についたばかりだ。温暖化によってドイツの誇る森も枯れ死が広がっている。さらに豚や鳥の大量飼育は動物虐待であると批判が高まっている。肉食を減らそうという動きはFFF「未来のための金曜日」などの若者たちだけではなく、一般の国民の間にも広がりつつある。このように農業食品省には問題が山積し、農林及び食品の抜本的な政策転換が求められている。ちなみにオズデミル氏は子どもの頃から菜食している。

外務省とアナレーナ・ベアボック（40歳）

緑の党の共同党首ベアボック氏が外相に就任した。同氏は、これまで中国とロシアに対して人権問題の面から厳しい批判を重ねてきているので、両国に対してメルケル氏よりもより批判的な外交政策が取られるだろう。メルケル氏は経済と人権問題のバランスを上手に取ってきたが、新内閣では中国との経済関係が悪化することも考えられる。ベアボック氏は、さらにロシアとの共同プロジェクトであるノルドストリーム2（バルト海に施設されたガスパイプライン）の稼働に反対している。ウクライナの東部の国境にロシア軍の大部隊が集結しているので、プーチン氏とおそろわず対峙しなければならない。これまで外交の重要な局面ではメルケル氏が長い経験と独自のパイプを使ってうまく調停してきたが、シュルツ氏がベアボック氏に緊急の外交をどこまで任せるかわからない。野党の党首としては一定の評価を得てきたが、外相としての力量は全くの未知数である。

ベアボック氏はちなみにロンドンの大学で国際法の修士課程

を修了している。

2. コロナ危機から抜け出られないドイツ

11月25日に1日のコロナの新規感染者数が7万6千人、死者数が351名に達し、昨年からの累計死者数が10万人の大病台を超えた。死者の9万5千人は60歳以上と発表されている。60歳以下は死者数こそ少ないが、重篤化した患者が多い。



夏にウイルスの活動が弱まり、感染者数が大幅に減った段階で、秋から冬にかけてのウイルスの活動期に備えるべきだったが、総選挙及び新政権の連立交渉などのために、適切なコロナ対策、その中心となるべきワクチン接種活動が疎かになってしまった。11月で接種率が70%以下にとどまったのと、ワクチンの効果が半年後に弱まるというイスラエルからのデータを重視しなかったのが、三度目の追加接種のスタートが遅れてしまった。そのため10月から感染者数が急増した。

それとデルタ株は感染力が以前のウイルスに比べて6倍から8倍と強烈なので、集団免疫にはそれまでの70%以上ではなく、85%以上が必要と言われている。

この7万人を超える新規感染者及び4000人ものコロナ入院患者の8割以上が未接種者なのだ。そのために多くの病院の集中治療室がいっぱいで、他の重症患者や急患を受け入れられない状況が続いている。救急病院は、空いているベッドを探して、1時間も電話しまくっているのが現状だ。その間、その患者は救急車の中で待たされるわけだ。

このように未接種者がドイツの集中治療体制を独占しているのは許されないという空気が国民の間に広がるようになった。ワクチンを接種するかどうかはたしかに個人の権利に属するが、未接種者は他の個人の権利を侵害しているので、権利の濫用だと批判されている。だから、全国民の接種義務に対する賛成者がこの数週間でぐっと増えている。一ヶ月前までメルケル前首相も含めてほとんどの政治家は反対していたが、個人の基本権利を声高に主張する自民党のリーダーたちも賛成に回りつつある。憲法裁判所が11月30日に、自民党や市民が違憲と訴えた夜間禁止を含むロックダウンに対して、合憲と判断を下したことも追い風になっている。



集中治療室は、部屋と機器は十分あると言われている。ところが、マンパワーが不足していて、対処できない。辞めていく人が多い上に、その後が埋まらない。そしてスタッフは2年近くの治療と看護で疲れ切っている。

現在多くの州では、公共の乗り物利用や一般商品の買物にはワクチン接種証明か感染症回復証明のどちらかが前提になっている。さらに職場やスポーツなどの観戦にも迅速抗原テストの陰性証明が必要だ。未接種者は薬局や必要な食料品の買物以外に外に出られない。このように外堀を埋めて、ワクチン接種率を上げようとしている。2月ごろにはオーストリアのように全国民ワクチン接種が義務化されるだろう。

このように2年近くも続いている危機的状況の中で、最も手腕が問われる保健大臣を任されたのが、カール・ラウターバッハ氏である。多くの国民、あるいは野党のリーダーからも現在のコロナ・パンデミックに最も適任だと目されていた人事だ。ただ、社民党内ではあまりにもマスコミにおける露出度が高い（主な政治トーク番組に時には週に2回も3回も登場している）ので、反感を持たれていた。

ラウターバッハ氏は 膨大な知識と広いネットワークを活かして最新の情報を得た上で、多くの場合的確な発言をしてきた。また間違った場合には、きちんと誤って訂正している。専門家としての評価は揺るぎないが、ドイツの保険体制の再編成、デジタル化なども同時に進めなければならない。それぞれ独自に活動している連邦政府と州政府の問題も解決しなければならない。

全国民のワクチン義務化の動きに対して、ワクチン反対者たちのこれまで以上の過激化が恐れられている。先週にはザクセン州の保険大臣の個人の家の前で昔のナチス時代を思い出させる松明デモがあった。さらにザクセン州首相に殺人の予告が届いている。ドイツの極右は殺人テロも厭わない。

ラウターバッハ氏は労働者階級出身のせいで、進学コースに進めず、苦勞したが、最終的に秀才ぶりを発揮し、大学進学を果たした。医学と疫学と衛生学を専攻。ハーバード大学に留

学し、医学博士号取得。ハーバード大学の客員教授とケルン大学の教授もしている。ただし、現在は連邦議員なので、休職している。

3. 休む間もなくフル回転のショルツ連立政権

ベアボック外務大臣は就任後いち早くパリに飛び、フランスの同僚と会談した後、翌日ブリュッセルで EU の外交担当官と話し



合いを持った。その後 NATO 軍の司令官とウクライナ問題を話し、息吐く間もなくポーランドに飛び、ベラルーシとの国境における難民問題を同国外相と相談するという忙しさだ。フェザー内務大臣は就任後、ベラルーシとポーランドの国境にいる難民の問題を EU 内で話すために、直ちにブリュッセルに飛んだ。二人の後を追うようにして、金曜の午後ショルツ首相もパリに飛び、マクロン大統領を表敬訪問。その後さらにブリュッセルでフォン・デア・ライエン委員長と会談。このように EU 及び関係諸国と歩調を合わせながら、国際政治が行われている。

ドイツ国内では9日の木曜にはショルツ首相の下で州首相たちとのパンデミック対策についての最初のビデオ会議が持たれた。金曜には連邦議会で感染予防法の補正案が議論され、医療施設と介護施設の勤務者に対するワクチン接種義務が決まった。これには医療者や介護士だけでなく、食堂や清掃関係者も含まれる。連邦参議院も賛成した。

メルケル氏の16年間の政治の後、ドイツの社会と経済を根本的に改革するのだという意気込みで、ショルツ連立政権は最初からフル回転をしている印象を受ける。最初の100日が勝負だ。



ホームページ



Facebook ページ



Instagram



冬学期申込フォーム

ドイツにハイデルベルク同窓会があります

同窓会はデュセルドルフ・ケルン地区を中心に
ハンプルク地区、フランクフルト地区があります。

最新の情報交換の場として、ドイツに赴任の方
から留学生までお気軽にご連絡ください。

ドイツ語学院ハイデルベルク同窓会・欧州代表事務局

代表：新野 直弥

e-mail:heidelberg@kddnet.de

メルケル首相の成績表

ーメルケル前首相の16年を振り返るー

2021年12月8日
ハイデルベルク同窓会会長 新野 直弥

Covid-19 禍でも頑張ってドイツ語を学習なさっている皆さん、いかにお過ごしでしょうか。

今年を振り返るとコロナ色とも言える1年間ではありましたが、昨年既に欧州のコロナに関する記事を書きましたし、皆さんにはもうコロナの話題は飽きていると予想しますので、今年は別のテーマ、メルケル前首相を取り上げます。

メルケル前首相の父親は旧東独の牧師、母親は語学の教師、本人は物理学博士である事はよく知られている。そのような政治と無縁の出身の女性は何故、どの様にしてドイツ初の女性首相になり、欧州は勿論、先進国では随一の4期16年の長さに渡る長期政権を担ったか。

メルケル前首相はかねてより総選挙に出馬しないと表明しており、本年10月26日任期を終える筈であった。とは言えショルツ首相の元、新政権が発足したのは12月8日であり、前日7日の退任ぎりぎりまで重責を担った。

それも、緊迫するウクライナ情勢やベラルーシ国境に集まる難民問題、更には変異株オミクロン感染の急拡大する国内対応と、難問を前に休む間もない多忙ぶりだった。

12月3日には連邦軍の最後の閲兵式では7分に近いスピーチを行い、約1時間の式典中じっと動かずに臨席していれば、外気温1度の寒気では恐らく体感温度は更に低かったであろう。最後まで人並外れた忍耐力を求められ、現代風に言えば「超ブラックな」職務を果たした、と言えよう。

https://www.youtube.com/results?search_query=zapfenstreich+merkel

しかし、感情論は排しながら、改めて前首相の残した功績と失策を検証し、独断と偏見でここにメルケル前首相に「成績表」をつけてみたい。首相在任中に勃発した問題や政治活動において取り組んできた主な政策に成績を付けて評価を試みると、下記の通りである。皆さんは如何、考えるであろうか。

1. 内政(原子力などエネルギー政策、洪水被害を評価基準に) A (優)

メルケルが首相就任時に何と揶揄されたか。「コールの娘」である。つまり政治家として初心者であるにも拘らずコール首相に引き上げられ、遂には首相にまで昇りつめた訳である。し

かし就任後の采配ぶりは首相就任前より称賛に価する。そして最後はコール(1982年～1998年)と並ぶ4期16年の在任期間を全うした。ドイツ史のみならず世界

史にも残る「ベルリンの壁崩壊」という歴史的な出来事でやっと政治と関わり合いになる転機が訪れた。しかも閣僚として入閣したのは第4次コール政権という「遅咲き」である。コール元首相の後押しがなければ、出世街道まっしぐらとはいかなかった

たかもしれない。ところがメルケルが所属するCDUへの閣僚金が発覚し、しかもその事件が起きたのはコール首相時代であった。幹事長であったメルケルは恩師でもあるコール元首相を批判したが、これは相当な決意があった事だろう。

また、コロナ渦の中で発生した史上最大の洪水被害があったが、これにもいち早く対応し被災地を訪れている。後継者となる筈のラシェット NRW 州首相の被災地での不謹慎な態度がマスコミで大きく報じられ、総選挙で与党が敗北、遂には党首も降ろされたが、メルケル首相の後任としては不適格と言わざるを得ない。

メルケル首相の内政上の功績の真骨頂はやはり脱原子力と再生可能エネルギーへの転換とも言えよう。しかしドイツの一人当たりの温暖化ガス排出量ではEU平均を上回り、自動車の二酸化炭素排出量も多い。ぎりぎりでも優という評価であろうか。

2. 外交 C (可)

国際政治は数字や統計で集計し難い分野であり、しかも判断当時から10年後或いは50年後に再評価される事もある。報道内容も書き手によって隔たりや偏りがある。報道されない事実も多い。従って評価は難しいが、あえてメルケルの功罪を指摘する。ドイツ産業とりわけ自動車業界への配慮から中国の人権問題には断固たる態度を取らなかった。中国とは蜜月を築いたが、中国は決して民主化していない。ロシアに対しても国内のエネルギー政策を優先する余り、ノルトストリームパイプライン敷設を進めた。(歴史的配慮が働いている見方も強いが、東欧諸国に対してもドイツは大きな負の歴史があるのだから、ロシアのみを特別扱いするのは片手落ちである)

ただ、トランプ大統領、エルドアン大統領、プーチン大統領と丁々発止の渡り合いができたのはメルケルならではの、「優」や「良」とは言えなくとも、合格点は付けられる。

メルケルは「対話の重要性」を説いた。これはもっともであるが、対話の窓口は開いておきながら水面下では徹底して相手を攻撃する、これが外交の実態である。対話を重視する余り、裏切られた結末となった外交は、歴史が証明している。次政権には繰り返して欲しくない。





3. ギリシャ危機に端を発する欧州債務危機 やリーマンショック対応 A (優)

ギリシャ危機のそもそもの原因は同国の財政破綻であるが、会計用語に例えるならば、粉飾決算に当たる。莫大な債務、財政破綻などの負の連鎖がギリシャから南欧全体に拡大する事態は理解できる、しかし脱税が蔓延し、ユーロの信頼性を利用して多大な債券の発行を続けながら長年徴税を怠り、国家ぐるみで虚偽を繰り返した挙句に財政破綻した国に何故、ドイツ国民、或いは他のEU北部諸国の「まじめな納税国」が巨額の援助を行わねばならないのか？この不満を受け止め、国民ひいてはEUの「まじめな納税国」を辛うじて説得し、EUの財政規律違反まで犯して援助をまとめたのはメルケルだからこそ、である。イタリア人にとってみると、当時の欧州中央銀行ECB総裁のマリオ・ドラギ（現首相）の功績となろうが、資金最大拠出国のドイツを納得させられなければ、まとまらない話である。メルケル抜きで欧州通貨危機の克服は不可能であった、と断言できる。

4. 難民問題 D (不可、落第)

メルケル前首相の唯一の落第点、最大の失策は難民問題に尽きる。

ギリシャ債務危機で大きな成果を残したものの、南欧諸国からの評判は悪かった。危機を辛うじて収束してほどなく発生したのがこの難民問題である。難民を人道上的配慮から救ったという国際評価もある。しかし、ドイツの国会での十分な議論もせずに独断ともいえる決定を下したのは明らかな失策である。

これはドイツのみならず、EUにおいても将来に渡り非常に対応が困難で、各国で賛成・反対と国民が二分してしまう、大きな禍根を残す結果となる。一度受け入れた難民は、余程の理由がない限り祖国には戻らないであろう。親世代はともかく、子供世代は通学すれば定住するようになるだろうし、労働人口が足りないドイツは難民に衣食住を与えるのみならず、職業訓練を施し労働力として期待する。勿論、期待に応える難民も何割かはいるであろう。しかし、単に生活に困窮するという理由で祖国を離れた難民も多い。難民には政治難民と経済難民の2種があり、後者は経済困窮により祖国を脱出してきた訳だが、受け入れ国で生活の地盤が確立されてしまえば、政治的迫害を逃れてきた前者の政治難民とは異なり祖国に帰る理由は稀薄である。就労が目的で海外に派遣される駐在員、会社員とはスタンスが全く異なるのである。2015年大晦日に勃発したケルン中央駅での集団暴行事件・性的被害は、形を変えて後日も発生する。ドイツの警察は事前届け出制のデモには周辺都市の応援も借りて万全の警備で対処できるが、何の前触れもなく発生する大規模な暴動には脆弱である。事件は後々まで尾を引き、Pegidaという極右団体やAfDという右翼政党が人々の関心を集める結果を生む。難民問題は経済支援をすれば解決できるような単純な話ではなく、EU

のみならず世界レベルで取り組むべき問題であるのにメルケルはドイツでもEUでも十分な議論を経ずに受け入れを決断した。この代償は非常に大きく、今後も尾を引く。4期目を迎えたメルケルは人気を失い、州選挙では（声がかからないのではなく）応援演説を断られる始末程であった。従って落第点をつける。しかしこの不人気を挽回する出来事が起きた。

5. Covid-19 対策 B (良)

コロナ対策で成功したと言える首相は世界にいない、と断言できよう。

イスラエルも英国もワクチン接種を世界に先駆けて開始し、一時期は抑え込みに成功したかに見えたが、英国はその後上下を繰り返しながら増加し、11月には5万人を突破した。ドイツとの人口比で見れば、やはり5万人は多い。イスラエルも9月には感染者は最大数に達した。ドイツにおける感染拡大を止められなかった責任をメルケルに求めるのは誤っている。むしろ当初より一貫して自宅隔離やロックダウンを、ワクチン開発後は接種に非常に積極的であった。しかし経済界やデモ隊に強く反対された各州首相は抑え切れず、再拡大を招いた。州政府で緩和措置を取ったりワクチン接種が低い州では感染拡大している訳だから、責任はメルケルに帰すべきではない。むしろ理系出身として科学的に、理論的に、そして分かり易く国民に粘り強く説得を続けてきた。その説得を聞かずにマスクを着用せずデモ活動を行ったり、ワクチン接種により慢心して密な接触で感染を拡大したのは一部の国民や反対派である。ただ、政治家は結果が全て、という観点ではBの合格点の成績が妥当であろう。現に昨年は深刻な被害を受けたポルトガルやイタリアではワクチン接種が順調に進み、感染の抑え込みに成功している。早期にワクチン確保に全力を注ぐべきではなかったか。

メルケル前首相の総合評価 B (良)

断と偏見で評価してみたメルケル前首相の成績表、まああの合格点でBという総合評価になった。皆さんはどのようにメルケルを評価するだろうか。そして、もし自分が政治家として最後は首相に上り詰めたと思えば、メルケル以上の成果は挙げられた、と考えられるであろうか。

CDU/CSUや極右政党AfDを除いた新政権も、連合体でしか政権はとれなかった。最大得票を得たSPDですら僅差での勝利である。緑の党は第3党とは言え、同じく政権入りしたFDPとは真逆の政策目標である。言わば反CDU/CSUで結束した寄り合い所帯とも指摘できる。メルケルが去ってどのように指導力を発揮し、ドイツ、ひいてはEUを率いるのか。これを実証しなければならぬのがシュルツ新首相である。ドイツの新首相の責任は重く、課題は多い。



ネット時代のドイツ語学習

実務翻訳講座担当 上田 浩二 学院長

これまでは受講生のかなりの方々が、ドイツ語圏を旅したい、ドイツ語圏で学びたい・働きたい、あるいはドイツ語を話す人たちと言葉を交わしてみたい等々の希望をもって、ドイツ語を学んで来られました。ところがコロナ感染症（COVID-19）が広がり、2020年2月には日本国内でも指定感染症に指定され、ドイツ語圏が遠くなってしまった感じがあります。

たしかにドイツ語地域へ足を運ぶことは難しくなりましたが、今のような時代には楽しくドイツ語と接する機会はたくさんあります。例えば、ネットでドイツ語のニュースや番組を日本にいながらにして（しかも無料で！）楽しむことが可能です。特別に申し込まなくても、ドイツ語圏で流されているニュースや映画やテレビの番組が見られるのです。と、ここまで読んで、自分のドイツ語の実力ではムリと諦める方が多いと思いますが、ちょっと待ってください。ネットなら同じ個所を何度でも聞き直せますし、なんと話された言葉をそのまま字幕で確認することもできます（早すぎるようなら巻き戻すことも可能）。しかも、相手に遠慮することなく何回でも見直しや聞き直しが可能です。それに映像が組み合わさっているの、辞書を引かなくても、何を指しているかがわかったりします。

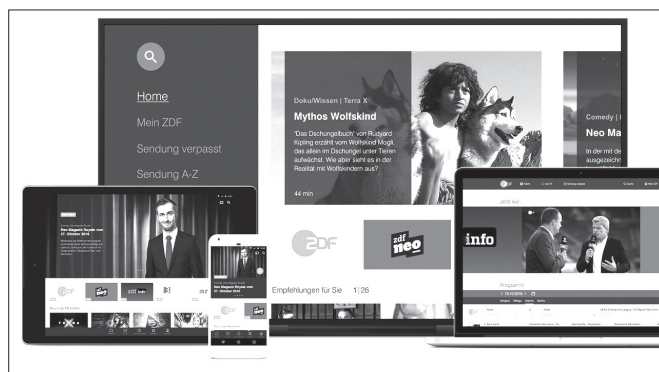
これは、ドイツの公共放送であるARDやZDFが放映済みの番組をMediathek（= Media + thek）としてネットで無料で流しているためです。例えば、ご自分のコンピュータのタブにZDF Startseiteと打ち込んでみてください。するとそのすぐ下に[Startseite-ZDFmediathek](#)が出てきます。これをクリックすると、現在ネットで見られる番組がカテゴリーごとに出てきます。例えば、Serien-Highlightsは一連の人気のあるシリーズもの（これだけでもシリーズ=Serienと分かります）、Doku-Reihenは過去の各種の分野のドキュメンタリー（一回限りのものと、数回のシリーズものを含む）、そしてZDF heute Nachrichten und Hintergründeでは、最新のニュースやその背景の解説があります。また、家族全員が楽しめるFilme und Märchen für ganze Familie、あるいはKrimiserieのような犯罪も



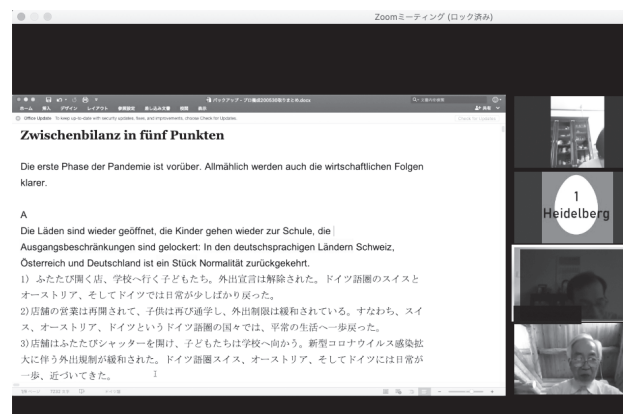
の・探偵ものがあるかと思えば、Dokumentenmtation はドキュメンタリーです。またその他にも、歴史もの、料理番組、科学番組など、いろいろなジャンルものもあります。

ただ、ある種の番組は放送の権利関係のために、”Aus rechtlichen Gründen kann dieser Beitrag nur in Deutschland gezeigt werden“（＝「権利上の理由から、この番組はドイツでしか見られません」）という場合も残念ながら少なくありません。しかし、このMediathek全体には、何千（あるいは何万?）もの番組が無料で公開されているので（そして毎日のように増えているので）、きっと興味・関心のある放送が見つかると思います。

大事なことは、ご自分の本当に関心のある分野を何度も繰り返して見ることでと思います。内容が分かっていると、何度か聞くうちに「ああ、あのこと」とか「こういう時にはこう言うんだ」と納得が行き、不思議なほど単語や表現が身につきます。まず、無理をしないで数か月ほど試してください。コロナでいろいろなことができない状況ですから、こんな形でドイツとドイツ語を学んではいかがでしょう



Startseite ZDFmediathek



実務翻訳プロ養成講座のオンライン授業風景

45周年に思うこと

ドイツ言語文化研究所代表 伊藤 美恵子

株式会社ドイツ言語文化研究所設立登記 1975 年 12 月 8 日、翌 1976 年 2 月 2 日ドイツ語学院ハイデルベルク開校、それから 45 年、今私は 88 歳、私の後半生はハイデルベルクと共にありました。

当時まだ大学院生だった初代学院長柴田昌治と言語学博士の Marita Heimal を中心に井口秋子先生、高田瑠奈子先生、高田三郎先生等多くの方々に助けられての出発でした。先年 40 周年の記念 party に大阪から駆けつけてくださった最初の頃の生徒さんで当時大学生だった小堀徹さんは、「ハイデルベルクは柴田さんや伊藤さんだけではない僕達も一緒に作ったのだ」とおっしゃいました。確かにあの頃の生徒さんは、電話をかけたりビラを配ったり積極的に宣伝をしてくださいました。毎月持ち寄りで Party があり、Weihnachtsparty も法曹会館などの大きな会場でやるようになる前は、代々木の教会をお借りして、Buero の職員と大勢の生徒さんが、ケーキも料理も手作りして、何回も車で運んで、それはそれで大変でしたが楽しくて、懐かしく思い出されます。

その頃は各学期の生徒数が 1200 人くらいあり、早く申し込まないと満員になりますよ、と言ったものですが、コロナ禍もあり生徒さんが 5 分の 1 くらいになった最近では、期日までの申し込みが少なくとクラスが成立しません、というのですから昔日の感ありです。

開校から 20 年くらいは学院の経営は大変でしたが活

気があり、生徒さんたちはテキストの Dialog をよく暗唱していて、ZD の成績もハイデルベルクがトップという時代でした。その頃、野尻湖や赤倉で行った夏合宿には日本全国から申し込みが有り、毎夏、3 期に分けて開催、レベル別のクラスで学んだ後は、皆でゲームをしたり、ドイツ語劇の練習をしたり最終日のお別れ Party まで楽しい日々でした。10 年余り続いた合宿で 10 組以上のご結婚ゴールイン。まだワープロもない時代に、参加者が代わる代わるハイデルベルクの和文タイプライターを打ちにきて文集「邂逅」を仕上げたのも懐かしい思い出です。

45 年の間にハイデルベルクで学んでくださった方々には著名な指揮者・演奏家など音楽関係の方が多く、他には鳥越俊太郎さん、姜尚中さん、有吉玉青さん、川嶋紀子さま、そしてスキー複合金メダルの河野さん等、また 40 年以上生徒を続けてくださっている方、親子孫 3 世代の生徒さんなど多士済々です。そのドイツ語学院ハイデルベルクが、ビルの建て替えて来年中にこのビルを出なければならなくなりました。駅近くに小さくても良いからと探しながらこれまでの 45 年を振り返って感無量の 2021 年の年の瀬を過ごしております。



1978 年 事務局長時代



2016 年創立 40 周年記念パーティー



2019 年 Weihnachtsparty

ハイデルベルクの歴史

- 1975 年 株式会社ドイツ言語文化研究所登記
- 1976 年 2 月 2 日 ドイツ語学院ハイデルベルク開校
理事長 梁瀬次郎（ヤナセ社長）
名誉学院長 ツンデル（ハイデルベルク市長）
学院長 柴田昌治
- 1976 年 7 月 第 1 回ドイツ語学研修旅行 以降約 10 年にわたり開催
- 1976 年 8 月 サッカー部設立
- 1977 年 第 1 回スキー合宿 以降 1990 年代まで開催
- 1977 年 学校新聞「Heidelberger」初版刊行・発行元：ハイデルベルク新聞部
- 1978 年 11 月 通信教育開校「Fernkurs」開始
- 1980 年 第 1 回合宿 中止期間を挟み 2008 年まで開催
- 1981 年 3 月 お茶の水分校開校
- 1981 年 女子サッカー部公式試合に初参戦
- 1981 年 柴田学院長が NHK テレビ ドイツ語講座講師を担当
- 1982 年 翻訳クラスで「マリアブラウンの結婚」を翻訳出版
- 1987 年 お茶の水分校閉校
- 1999 年 翻訳講座の通信教育開始
- 2001 年 ドイツ語学院ハイデルベルク同窓会 欧州代表事務所設立
- 2011 年 上田浩二 ドイツ語学院ハイデルベルク学院長に就任
同年ドイツ連邦共和国功労勲章叙勲
- 2016 年 Würzner ハイデルベルク市長 名誉学院長に就任
- 2020 年 3 月 オンライン授業開始・ハイブリッド授業開始
() 役職は当時



柴田初代学院長と
ツンデル初代名誉学院長



上田現学院長と
グルツナー現名誉学院長



1978 年頃
ドイツ代表カラーのユニフォームのサッカー部



1982 年女子サッカー部
緑と黒のユニフォーム



1985 年 Ski 合宿



1982 年野尻湖合宿



1988 年北志賀合宿



2005 年白馬八方合宿



1970年代・活気溢れる授業風景



1982年 Weihnachtsparty
ドイツ語寸劇を披露する生徒の皆さん



1989年・6時間 X 週5日の特別集中コース
ほとんどが企業派遣生



Weihnachtsparty
恒例となった全員でダンス



2019年 Weihnachtsparty
講師と Party スタッフ



2020年
新型コロナ感染拡大に伴いオンラインと対面混合の
ハイブリッド授業を全クラスで導入



2020年 Online-Weihnachtsparty
ドイツから懐かしい講師も参加



1996年創立20周年記念パーティー



2006年創立30周年記念パーティー



2016年11月創立40周年記念パーティー



冬学期新設クラスのお知らせ

ドイツ街歩きシリーズ シーズン3 世界遺産を巡る

講師：中山 純

ドイツ仮想旅行 „Die Weltkulturerben in Deutschland “
ドイツ仮想旅行シリーズ „Den Fluß entlang “に続いて 2022 年冬学期から「ドイツ世界遺産を巡る旅」を開講します。ヴェーザー川とライン川を下りながら、沿岸にある大小の都市の紹介文を読んだ前回の 2 つのコースに継続する形で、このコースではユネスコ世界文化遺産に登録された文化遺産を題材にして、ひとつのトピックについてより深く読んでいくことを目指します。「川下り」のような通過型の視点から、時間をかけて対象を観察する「定点観測型」の視点へ切り替えていきます。

視点や姿勢を変えることによって、世界文化遺産を通して得られる地域の歴史や建築史、宗教史や美術史、経済史などの分野についても読む量を増やすことが可能になるでしょう。ただし、あくまでも「仮想旅行」の範囲とレベルでのことなので、各分野の専門文献を講読するのではなくて、理解に役立つ必要な基礎知識と語彙などを習得することを中心に置きます。

コースは 2022 年の冬学期から始めて夏学期まで、各学期 10 回、全 30 回の授業を予定しています。受講対象レベルは „Den Fluß entlang “のシリーズを受講された方、ドイツ語学習歴 3 年以上の方で A2 以上の語学力を有する方になります。教材は受講時にプリントで配布します。

- ・ 冬学期の候補地：アーヘン大聖堂、ナウンブルク大聖堂、巡礼教会ヴィース
- ・ 春学期の候補地：ベルリン博物館島、ポツダムとベルリンの宮殿群と公園群、ベルリンのモダニズム集合住宅群
- ・ 夏学期の候補地：アウクスブルクの水管理システム、ツォルフェライン炭坑産業遺産群、芸術家コロニー「マチルダの丘」

日 時：火曜 19:00 ～ 20:30 全 10 回

受講料：38,500 円（税込）・教材費：2,000 円

※大好評だったドイツ街歩きシリーズ「シーズン 1 ヴェーザー川を辿る」がアンコールに応じて冬学期の水曜昼間に帰ってきます。

ドイツ語実力 UP 無料ワークショップ開催

2022 年 1 月 29 日（土）14:00 ～ 16:00

新規講座の目的と詳細を中山純先生が説明

通学定員 6 名（満席の場合は online にてご受講いただけます）

お申込みは電話 03-3374-4863 または QR コードから



ドイツ語 実力 UP

講師：中山 純

＜講座開設の目的＞ 現在、大学やハイデルベルク学院のような語学学校やカルチャーセンターのドイツ語授業で使用されている教科書は、その多くが欧州共通参照枠 (CEFR) と呼ばれるカリキュラムやレベル設定に準拠して編纂されています。CEFR の理念の根底には、欧州のどこの国や町に移動しても、自分の語学力に準拠した学習を継続できることと、ターゲット言語が使われている国や地域で支障なく日常生活や勉強ができるようになることがあります。

欧州で生活していくためには多文化共生社会への適応のほか、EU の中核をなす国々で常識になりつつあるパッチワークファミリーやジェンダーフリーの思想への理解も必要になります。総称的に Landeskunde (地誌情報) と呼ばれる知識や情報は、切り離して教えるのではなく、言語活動の中に包括して伝えていきます。優れた教授法であり、ドイツ語圏で暮らしたり学んだりする人にとっては避けて通ることができない問題への対処方法を習得することが可能です。

その一方で、コミュニケーションのモデル会話の中に含まれている多様な異文化情報に目を奪われて、肝心のドイツ語そのものの姿がかすんでしまっているような学習者も見受けられます。ドイツ語を使う上で欠かすことができないドイツ語圏の情報へも目を配りつつ、モデル会話から離れて、ドイツ語の力を向上させる授業ができないものか考えてきました。一部の学習方法は当学院のプライベート授業でもすでに使っていますし、聴解力の強化法については検検対策講座でも紹介したことがあります。今回は、試験対策などの特定のスキル強化を目指すのではなく、読む・話す・聞く・書くという 4 技能を鍛える方法を紹介しながら練習していただき、いずれ自立してドイツ語力を強化できるようになることを目指します。

＜授業の組み立て＞

特定のトピックについての短い文章の講読

新規語彙や文法を確認しながら日本語に訳す

内容についてドイツ語で質疑応答

文章の聴解と朗読

文章の要約やパラフレイズ

名詞化など品詞の転換、同義・反義の確認などの語彙練習

トピックについてドイツ語で意見の開陳・交換

意見交換についての短い記録の作成

日 時：土曜 14:00 ～ 15:30 ・全 10 回

受講料：38,500 円（税込）・教材費：2,000 円